

震える、惑う 緊急期の町

第4章

2011年3月11日午後2時46分。

その時間を境に、大槌町は混乱と不安に包まれた。

津波の後、町の人たちは何を考え、行動し、
いかにしてこの難局を乗り切っていったのか。

災害対策本部が置かれた中央公民館と

町最大規模の避難所だった城山公園体育館で

震災発生からの3日間に何が起きていたのかを振り返る。



城山公園体育館の避難所に設けられた「拾得物コーナー」（2011年3月27日撮影）。町中で見つかった家族写真などが届けられた

発災直後

土煙の向こうに津波が見えた
そして、その津波は猛烈な勢いで
町をのみ込んだ



末広町を襲う津波。土煙が上がり、もやに包まれたような状態となった

1日目——発災から翌朝まで

2011(平成23)年3月11日、東日本大震災が起きたあの日。かつて経験したことのない揺れと大津波は、人から冷静さを奪う。この混乱のさなか、人は何を思い、どのように行動したのか。翌12日に町災害対策本部が置かれる町中央公民館や、大規模な避難所になった城山公園体育館で起きていた出来事を取りながら、解き明かしていく。(記事中の人物の年齢は取材当時、町役場の現職員は敬称略)

一瞬で町が消えた

3月11日は曇り空。まだまだ春は遠いと感じさせる寒い日だった。地震が起きた午後2時46分、教育委員会学務課主任(当時)の小笠原純一(46)は、同課のある大槌町小の中央公民館で仕事をしていた。今まで体験したことのない揺れの

きさと長さにただ事ではないと直感したという。高台にある中央公民館からは町が見渡せる。揺れが収まって少し経過した後、窓を開けて外の様子を見た。

「建物の倒壊もなく、見た目にはいつもと変わらない町の風景でした。ただ、すでに避難を始める人たちが県道大槌小鉋線では渋滞が起き始めていた。徒歩で逃げる人たちが道にあふれ、車のクラクションがあちこちで鳴っていました」

その時、大槌町役場産業振興課主事(当時)の白澤洋喜(41)は、小笠原が見下ろしていた町の真ただ中にいた。公用車で移動していたが渋滞に巻き込まれ、一向に前に進む気配がない。同乗していた上司に運転を任せ、徒歩で中央公民館に向かうことにした。非常時には避難路で町民の誘導を行うのが白澤に与えられた役割。厳しい寒さの中で

次々起こる難題

これから多くの人が避難して、今を予測し、町職員の姿を探したが、この時点で見知った顔はない。そのうちに大槌小学校の児童

や、町立大槌中学校の生徒たちが次々に避難してきた。小笠原は中央公民館の裏手にある駐車場に子どもたちを集めていた。津波の様子を見せないためだ。小笠原はその日のことを思い返す。

の任務になることから、白澤は防寒着を取りに一度自宅に戻っている。大槌小鉋線を歩いていると、「もや」の向こうに大きな波が見えた。押し寄せる津波は堤防を軽々と越えて、町はあつという間に津波にのみ込まれていく。白澤は歩く人たちに向かって「逃げる、早く逃げる」と声を掛けながら駆け出した。自身は当時の町立大槌小学校(現大槌町役場庁舎)校門脇で「旧跡大槌城址」の石碑が立つ、小さな岩山に全速力で駆け上がり、すんでのところまで難を逃れた。

「携帯電話を見ると友人から『大丈夫か?』とメールが入っていました。それがちょうど午後3時25分。津波の第1波が来たのがその前です。第2波は石碑の中ほどの高さまで来ました」

白澤はこの石碑の上に立ち、津波の猛威を目の当たりにした。大きな家が次々に流されていく。ぶつかり合った家がバリバリと大きな音を立てる。水に濡れ電気系統が故障

した車からは、クラクションが鳴り続けていた。どうすることもできず、ただ立ちすくんでいた。「津波を見ていた人にはいろいろな感情があると思います。私の場合は『呆然』という感情。ついさっきまであった町が黒く濁った水に覆われて、全部なくなってしまう。何が起きたのか分からない。そういう感じでした」

まだ水は町の中から引き切っていなかったが、暗くなつてからは身動きが取れなくなる恐れがある。白澤は石碑のある岩山から下り、中央公民館に向かって水の中を歩きだした。水位は腰の辺りまでであったという。

まずは中央公民館と隣接する城山公園体育館へ行き、避難所としての機能を整えなければならぬ。それは小笠原、白澤ともに考えていたことだ。この時、大津波が直撃した役場庁舎などで上司や同僚ら39人が犠牲になったことなど知る由もなかった。



旧大槌小と中央公民館の位置関係。住民は中央公民館まで急坂を上り、避難した

「子どもであっても、あの大きな津波であれば、人が流されていることは予想できるはず。駐車場の真ん中に集め、なるべく津波が見えない場所に誘導してくれるように大槌小学校の先生にお願いしました」

中央公民館に避難する町職員が徐々に増えてきたことで、次の行動に移ることができた。移動式防災無線の装置の組み立てを指示し、バケツ、ペットボトルを集め、飲料水の確保を行う。体育館の中にイベントなどに使う発電機があったが動かない。ちょうどその場に居合わせた高木電機管理事務所の高木正基さん(56)に修理を依頼した。残りの職員は津波で流された人の救助に向かった。水浸しになり歩けなくなると人はテーブルを担架代わりにして運ぶ。車ごと流されてきた人はフロントガラスを右で割って助け出した。その瞬間、その瞬間で判断していった。「あの震災は誰も経験したことのないもの。普段通りにやろうとしては駄目なのだ」と実感しました。

本来の命令系統であれば、起案して上司の指示を待つ。しかし、それを伺う管理職がいなかったこともあり、目の前で起きていることを即座に判断して解決しなければならぬ。そうしなければ手遅れになっていたと思います」

生涯学習課主事だった平館豊さん(38)は地震発生後、城山公園体育館に避難者が押し寄せ、そのことを予測し、受け入れ準備をしていた。その動きは非常にスムーズだったと記憶している。公共の施設ということもあり、半年ごとに災害を想定した防災訓練をしていたことが大きく役立った。さらには、この2日前に大きな地震があったことも「心の準備」につながったと平館さんは振り返る。

「普段から災害を想定した訓練をしていたので、こういう事態で自分がどのように行動すべきかが分かっていました。右往左往するようなことはありませんでした。2日前にもかなり大きな地震がありました

たが、3月11日の地震はそれよりもはるかに大きかったし、時間も長かった。これは大変なことになるなと思いました。自分は施設管理が仕事でしたので、公民館や体育館の館内を見て回りました。体育館は天井

から板が数枚落ちていましたが、それ以外に目立った被害はありませんでした。だから、体育館の中に避難してきた方々に入ってもらいました」

地震発生から時間がたち、辺りはすっかり暗くなっていた。この時点



押し寄せた津波の力によって、鉄筋の建物でさえ骨組みだけになってしまった



吉里吉里中学校から撮影した、吉里吉里海岸の防潮堤を軽々と越えて押し寄せる津波

で、中央公民館に集まってきた町職員の数は12人。手分けして、避難者の対応に当たった。避難者の中には衣服が濡れたままの人もいた。もちろん着替えの用意がないため、少しでも体を温める必要がある。いす席で800人収容の体育館に避難していたのはおよそ千人。防災備蓄倉庫に保管されていた毛布を出してきたが200枚くらいしかない。体育館にあった暗幕を切り分けて毛布代わりにしたが、それでもまだ数が足りない。

避難者は体育館だけでは収まり切らず、中央公民館の廊下やエントランスにまであふれていた。修理を依頼していた発電機はまだ動く気配がなく、電気が使えない状況は続いている。外気温とさほど変わらない室内の体育館の中には、知り合いを見つけ、無事だったことを喜び合う人、一方で家族の安否が分からず不安げな様子の人があった。余震が起きるたびに、体育館のあちこちで悲鳴が上がる。

城山体育館に迫る火

電気の問題を残しつつ、さらにもう一つの難題が持ち上がった。津波が来た直後から、大槌町内では火災が発生していた。そして、その火は中央公民館の裏山、そして坂道の下の方から迫って来ている。避難していた元消防署職員に小笠原が相談すると、駐車場に避難してきたタンクローリーをまず移動させることを提案された。火が近づいてきて、車に引火すればさらに被害が広がってしまう。そのことを心配してのアドバイスだった。中央公民館の裏手には、非浸水域に通じる林道城山1、2号線と合流する町道が通っていた。地元の人ほとんど通ることのないこの道が、自衛隊や物資運搬の救援車両の経路となり、人の命をつないだ。家用車で避難していた人たちに、同町道を伝って山間の方へ車を移動してほしいと声を掛ける。混乱した状況では連絡がうまく行き渡らない。

仮の災対本部編成

館内放送もできないため、予想外の事態が起きる。小笠原は言う。

「車が続々と移動し始めたことで、ここも危ないのではと思う人がそれぞれ避難行動を始めた。走る車を無理やり止めて同乗させてもらった、歩いて山を越えようとしたりする人も出てきた。そういうことが起きると、もう止めようがない、12人の職員で千人を抑えることはできませんでした」

風にあおられたことで、火が近づいて来るスピードが上がる。坂道の下から迫る火をまず食い止めようと考え、10人ほどの男性職員が集まり、空のペットボトルに建物内の貯水槽からくみ置きした水を入れ、ガードレール沿いに並んで、一斉に枯草に水をまくと、上ってくる火の勢いをかなり抑えることができた。しかし、裏の山から伝ってくる火については手の打ちようがない。ここに火が回ってきたら、いよいよ逃げ道がなくなる。時計は午後8時を回っていた。

「本来の災害対策本部が、この時間になっても動き出さない。ということは、職員は庁舎の屋上に避難していて、ここに来られる状況ではないと考えるようになりました。自分たちは自分たちで避難してきた住民を守らなければならない。そこで仮の災対本部をつくらうという話になり、中央公民館にいる12人の町職員で編成しました」

避難者の名前を聞き取る係、状況を確認する係と役割を分け、それぞれ対応を始めた。小笠原をはじめとする男性職員は、状況を確認する係として軽自動車で林道を走った。指定避難所などにどれだけの人数が避難しているのか、さらにはどんなことで困っているか、情報を集めた。車の中でラジオを付けると、大槌町の情報がなく、状況がつかめないとアナウンサーが告げている。情報を集めて発信しなければという思いが強くなった。

「金沢支所に衛星携帯電話があることを覚えていた。あちこちの避難所に立ち寄りながら、金沢支所を目指しました。金沢支所で衛星携帯電話を使って県庁に電話してみたのですが、話し中でつながらない。一緒にいた町職員が元広報担当で、たまたまNHK盛岡放送局の電話番号を記憶していました。運よく通じたので大槌町の現状を県庁に伝えてほしいとお願いしました。金沢支所から戻る途中にラジオで『大槌町は全滅』みたいなことを言っていました。生きている人もいるんだけどなど思っていましたね。ちゃんと伝え切れなかったという気持ちもありました」

中央公民館では、高木さんに依頼していた発電機の修理が終わり、電力が戻ってきていた。避難所を回る中で、さまざまな情報が得られた。その中でも緊急対応が求められたのは、津波で流された時に海水を飲んで腹痛を起こしている、あるいはいづも飲んでる薬がないなど、健康面

と説明した。ほどなくして中央公民館内に自衛隊の現地本部が立ち上がった。混乱と不安が入り混じったあの日のことを、小笠原は鮮明に覚えており、説明する言葉にもよどみがない。

「覚えているというよりも忘れられない。一つ一つが強く心に残り続けている。目の前の難題を乗り越えるために、知恵を絞る、行動する。そうしたら、いつの間にか朝になっていった」

に関わる問題だった。中央公民館には医師の道又衛さんが避難していた。どうすればいいのか対応方法を聞き、それを避難している人たちに教えることができた。中央公民館にさまざまな職種のプロフェッショナルが集まっていたことは幸運だった。しかし、難題が次々に持ち込まれる。全てに対応することは無理だった。

「体力のないお年寄りや服の濡れたままの人たちがいました。保健師たちの間で林道の先に老人ホームがあるので、そちらに移したほうがよいのではという話になった。金沢支所に向かう途中で、その老人ホームに行けることも確認していたので、ピストン輸送で人を運び続けました」

小笠原と共に車を運転する役割を担った白澤は、その夜のことを思い起こす。

「林道は真っ暗闇。町の中は水浸しではあったけれど、不気味に明るいです。船とか、車から燃料が流れ出る。流れ出した油は水より軽

いので水面に浮かんでいる状態です。バッテリーやプロパンガスを介し、その油に引火して火が上がる。石油系の激しい燃え方でした。それが一昼夜にわたり燃え続けた。街灯がなくても、外が明るく感じられる。プロパンガスの爆発も続いていました。1、2分に1回は大きな音を立てて爆発する。それが恐怖心をあおるんです」

今度は物資の調達の方法を考えなければ、ということになった。被災を免れた小槌の大槌リサイクルセンターに4トンと2トンのトラックがあり、中央公民館にあった方が便利だろうという判断で移動した。そして、日付が変わろうという時間になって、自衛隊のジープが中央公民館を訪れる。災害対策本部はどこかと問われ、本部が置かれるべき役場庁舎は津波被害を受けているので、中央公民館にいる町職員が代行している

と説明した。ほどなくして中央公民館内に自衛隊の現地本部が立ち上がった。混乱と不安が入り混じったあの日のことを、小笠原は鮮明に覚えており、説明する言葉にもよどみがない。

3月12日の朝に12人の職員が集まり、中央公民館でミーティングが行われていた。午前9時過ぎに自衛隊のヘリが飛来し、役場の屋上に避難していた人が救助されたという一報が届く。その中の1人である町教育長(当時)の伊藤正治さん(69)が昼過ぎに中央公民館に戻ってきた。「生きて帰ってきたぞ」と涙する伊藤さんの姿が小笠原は忘れられないという。



3月11日 15:38



3月11日 17:14



3月11日 19:36



3月12日 0:22

城山公園体育館から見た津波当日の光景。中央公民館にいた小笠原純一職員が携帯電話のカメラで撮影した。津波が押し寄せて水没した町、城山の山際で発生した火災を克明に捉えている

数少ない職員で対応

長い夜は終わり、朝が訪れた。小笠原はその日の朝のことをはっきりと覚えている。頬に吹き付ける風は冷たく、痛みを感じるほど。真冬の防寒着がなければ過ごせない寒さであり、例年の3月に比べればかなり気温が低い。しかし、真っ青な空が広がっていた。

「発災当日は星がきれいな夜でした。憎らしいくらいきれいだった。そして夜が明けると、すごくいい天気。いい天気過ぎて腹が立ちましたね。これは何だよ」と

どこにもぶつけようのないやるせなさ。青空から目線を落とせば、大槌の町は白く煙っている。それは火事のせいだった。あちこちで発生した火事はいまだにくすぶり続けている。高台にある城山公園体育館の中では、次々に難題が生まれていた。

第一にはトイレの問題だ。水がなくなることに備え、くみ置きをしておいたが、いつ足りなくなるか分からない状況。給水タンクの水は一滴も無駄にできないという気持ちがあった。水洗トイレのドアに「水を流さないでください」という張り紙をすると、便器には排泄物が山のように積み上がっていく。避難者から苦情が寄せられた。

「衛生上よくない。病気になったらどうするんだと。役場の職員たちが軍手の上にビニール袋をはめて、排泄物をすくい上げ、穴を掘って埋めていたんですが、それも限界がある。水で洗い流すことができないので、室内に臭いは残る。それに対しても苦情が来る。一つの問題を解決しても、また別の問題が持ち上がる。その繰り返しでした。避難者の方々に、トイレの担当、給食の担当など、役割担当を決め、交代し

ながらやってほしいと伝えたのですが、なかなかうまくいきませんでした」

この時点では正確な情報はつかめていないが、地震と津波の規模、そして避難状況から、かなりの人数の町職員が命を落としているであろうことが推定された。少ない人数では、どんなにがんばっていても、物資調達、安否確認などに手が回らない。そこにも苦情が寄せられる。受け止め切れない状況に陥っていた。何とかしたいけれど、何ともできないもどかしさがあった。

「印象に残っているのは、腎臓疾患で透析をしなければならぬ方。3月12日に透析をする予定だったらしいのです。『どうにかしてほしい』と言われるのですが、連絡手段がないし、病院だって正常に機能していない。僕ができることは保健師さんに相談するくらい。住民の方にお願ひされたことに応えるのが役場職員というものの、それに応えられないのがつらかったですね」

周囲が明るくなってから、職員に



3月12日に撮影した町方地区。被害の状況が明らかになってきた

よる情報収集も再開された。白澤が担当した安渡、赤浜方面は、大津波の翌日ということもあり、がれきが道をふさいでいる所も多くあった。車が通れない場所もあったため、途中で車を降り、徒歩で進んでいた。どこにどれくらい避難しているのか、何が不足しているのか。それらの聞き取りをしながら、町の被害を目の当たりにした。

「民宿の上に船が乗っているのも見たし、これは大変なことになったと思います。情報収集はしていましたが、紙やペンもなかった。目で見ただけで口で報告する。そういう感じでした」

困難を乗り切る知恵

通信手段がなかったことも、よく覚えている。発電機が稼働したことで、パソコン、コピー機などが使えるようになった。避難者には紙に名前を書いてもらい、それをパソコンで入力し、印刷したものを各避難所に

配った。携帯電話は宮古市か遠野市まで行かないとつながらない状況だった。大槌町の状況を広く発信するために活用されたのがアマチュア無線だった。

「元役場職員の方がやってくれました。普段のことができない状況では、人間は知恵を絞るようになります。それぞれが持っている知識やスキルを生かすことも大事です。それで乗り切れることは少なくともありません」

そう語る小笠原は大型自動車の運転免許を持っていた。普段はあまり運転しないが、震災の非常時には、燃料の運搬などの作業に携わり、被災者を支えた。

つらい安置所の仕事

震災2日目には、徐々に被害の状況が分かってきた。小笠原は目の当たりにした風景を忘れられない。それは悲しさと同様の繰り返りだった。



自衛隊のヘリコプターが飛来し、屋上などに避難している人を救助(植田俊郎さん撮影)



ヘリコプター内部(植田俊郎さん撮影)。救助された人たちが肩を寄せ合う



震災後の町方地区。かつての町の風景は失われた

「道路には、泥まみれになっているご遺体がありました。また、避難所の近くの家で知り合いのおじいさんが亡くなっている。それを見た人は見捨てておけるわけがない。避難していた人たちが、そのご遺体を中央公民館に『連れて』くるのです。本来、自治体の職員は遺体に触れてはいけないルールになっています。警察と自衛隊しか触れてはいけないのですが、あの時はそういうことを言っている状況じゃない。放置はできないので引き取ってきました。そういう役割も職員が担っていました」

同時期に中央公民館にいた生涯学習課社会体育施設班長(当時)の中村一弘さん(62)もつらい経験をしてきた。小笠原の言葉を継いで、当時のことを語り始める。



自衛隊による遺体搬送

担当した者が続けたほうがいいんじゃないかという考えになってきました。でも、人間は誰も同じではないんです。メンタルの強い人間もいるし、弱い人間もいる。それを責めるなんてできないですよ。続けているうちに精神的に参ってしまう人も出てくる。それぞれの安置所に担当を付けて、毎朝出ていくのですが、徐々に口数が少なくなっていく。職員たちもだんだん会話がなくなっていく朝になっても起きられなくなる職

員が出てきた。だんだんメンバーも減っていききました。残ったメンバーもつらいこと、言いたいことはあっただろうけど、ぐっと胸にしまいこんで、淡々と業務を全うしていました」

搬送された遺体は検視に回される。これについても大槌町職員が駆り出された。小さい町だけに顔見知りも多い。遺体の確認作業を行い、名前を書いた紙を付けていった。また、泥にまみれた遺体については、正確な検視を行うためにきれいに洗い流された。これも職員たちがバケツで水を運んで行った。

3月下旬からの話になるが、大槌町では火葬に関しても苦労があった。大槌の火葬場では、通常1日4体の火葬を行っていた。だが、東日本大震災では遺体の数が多く、1日6体の態勢へと切り替えたことで、機械が壊れてしまった。火葬ができない状態となり、他の自治体に協力を呼び掛けざるを得なかった。身元が分からない遺体については、検視を経た後、職員が立ち会い、火葬を行った



シーサイドタウン・マスト近くの風景。がれきが積み上がっている

という。また、火葬が滞る状況下で土葬も検討されていた。

「400体くらいのご遺体があったのですが、火葬できなかったため、町内の山手の所を仮埋葬地に決めていました。広さは400平方メートルくらいです。実際に準備も進め

ていて、いつでも土葬できるという状態になったのですが、他の自治体の火葬場で受け入れてもらえる体制ができ、実行直前で土葬は中止になりました」

「帰る場所がない」

震災発生から2日目。被害の状況が少しずつ明らかになったことで、次から次へと問題が生まれた。そして、それら全ては急を要するものばかりであり、解決したくても圧倒的に人員が足りない状況だった。城山公園体育館に避難した人々は、どんな思いで、2日目の夜を迎えていたのか。津波当日に釜石から帰宅する途中で渋滞に巻き込まれて車中で夜を明かし、徒歩で大槌町に戻った野沢文雄さん(74)の言葉を紹介する。

「泣き叫ぶとか、そういう状態ではなかった。多くの人が高台から町の状態を見て、腹を決めたという感じでした。諦めにも似た感情でしょ

う。自分にはもう帰る場所がない。だから、ここで避難生活が続けるんだと。皆さん、落ち着いていたと思います」



城山公園体育館の避難所。震災直後は千人を超える避難者がいた



中央公民館に設置された災害対策本部の関係車両。右から3台目はNTTの災害伝言設備の車両

3日目

動き始めた災対本部

津波発生の日に役場庁舎の屋上で夜を明かした職員は翌12日朝、自衛隊のヘリコプターに救助された。さらに他の避難所に散らばっていた職員が徐々に中央公民館に集まってきたことにより、その日の昼過ぎには本来の災害対策本部が立ち上がった。災対本部が最初に取り組んだのは、組織の立て直し。各セクションのリーダーを担うべき職員の多くを津波で失い、通常ルールに沿ったやり方では成り立たない。そのため役職の枠にとらわれることなく、求められる復旧作業に適した職員をリーダーに選び、さらに残りの職員に役割を振り分けていった。3日目を迎えたころから、災対本部の活動はより活発になっていった。

震災直後から大きく変わったのは「情報の多様性」だ。職員が町内した。人員が限られ、在宅避難している人たちの情報は正直拾い切れなかった。避難所にいる方には物資を届けられるのですが、在宅避難については、われわれが見落とししてしまう場合もありました」

業務さばき切れず

状況が明らかになるにつれ、小笠原は避難者に一刻も早く分け隔てなく物資を受け取ってもらえるようにしなければならぬと強く感じた。一方、県内外から個人的に物資を届けてくれる人が増えてきた。これは予想外の出来事だった。大槌のために役立ちたいという人が車に物資を積んで、中央公民館や各地区に駆け付けてくる。中央公民館では、支援物資は会議室に保管されていた。その量は徐々に増え続け、保管場所を埋め尽くすほどになった。届けられた支援物資は多種多様であり、人員を割り当てて、仕分け作業を行うようにした。

の状況を把握するために、避難者がいる場所を訪ね歩いた結果、さまざまな情報が集まるとともに、次々と新しい課題が浮かび上がってきた。小笠原は先頭に立って避難所を繰り返し訪問し、問題に向き合った。

「避難者から要望を寄せられ、予想外のことでも新たな問題として顕在化してきました。これからどうやっていけばいいのか。そんなことばかり考えていました」

孤立していたり、山間地にあったりする避難所については、十分な物資が届いていないことが分かった。とりわけ困難を極めたのは在宅避難者への対応だったと小笠原は振り返る。

「夜、建物に電気がついていれば、あそこには人がいるんだということに分かるのですが、まだ停電が続いている状態。津波が来ていない家でも、基本的には中を確認しない方針で

震災発生から3日目以降、日がたつにつれて危機的状況からは脱しつつあったが、やるべきことは日に増えていった。遺体安置所の管理運営や避難者のリスト作成に始まり、燃料の管理・運搬などについても職員たちが担当していた。これらの作業を行うにはあまりにも人が足りなかった。

「物資配分やインフラの復旧も大切ですが、やはり避難所の人たちの対応に重点が置かれました。避難所では職員を2人1組にして、1日交代、半日交代という形で常駐させていました。そっちに人が割かれるので、救護を担当する係、死亡届を受理する係、道路を切り開く係など、本来の災害対応には圧倒的に人が足りない。それぞれがオーバーワークになっていました。災害規模が大き過ぎるので、仕事をさばき切れないのです。災害時のマニュアルには、職員で全てをまかなうのではなく、民間業者の協力を得て対応するようにと書かれていました。

しかし、東日本大震災では、道路復旧に携わる建設業者や食糧を供給する米穀店など、協力を仰ぐべき業者も軒並み被災していた状況。マニュアルに書いてあるような対応はとうてい望めません。町全体が壊滅的な被害を受け、どうにもならない状態でした」

大槌町が震災以前に指定していた、中長期的な避難生活に対応する「収容避難施設」は29カ所。震災時には、畑の納屋や在宅避難などを含めると、避難所は優に100カ所を越えていた。これは想定をはるかに上回る数であり、避難所によつて、必要とされる物の内容も違う。

避難の状況を正確に把握し、支援物資を的確に配分するためには、各自が持つ情報の共有が不可欠だった。それを実現するために、災対本部のミーティングは、1日に朝と夕の2回実施。役場職員、消防、警察、自衛隊が集まり、朝は、その日1日にすること、あるいは前日に入ってきた情報の共有。夕は、



東日本大震災前の大槌町の航空写真(2011年3月13日撮影)



東日本大震災後の大槌町の航空写真(2011年4月18日撮影)



大槌小学校(現大槌町役場)は、津波後に起きた火災によって大きな被害を受けた

その日にどんな対応をしたか、何で困ったか、そして次にどのように対応していくべきかが主な議題となった。ミーティングを行う部屋には全員が入り切れず、廊下まであふれた。ここに飛び交う情報から、避難者への対応の活路が開かれることも少なくなかった。

「3日待てば助かる」

「誰がどの避難所にいるのか、次第に分かってきました。例えば、電気に詳しい人があそこにいる、あるいは、大工さんがあの避難所にいる。そういう情報が役立ちました。避難している人たちにも協力を依頼することで、オーバークワーク気味だった役場職員の仕事を軽減でき、さらには他の業務にも人員を配置できるようにになりました」

小笠原は「情報」のありがたみを感じるとともに、注意しなければならぬ点もあると言う。

「行政の職員というのは、役割ご

とに縦で線引きするのですが、避難所に行けば、そんなことを言っていられない。避難者の方々は、同じ役場の人間という捉え方をするので、普段とは接し方も変えなければなりませんでした。例えば寄せられた要望をメモする。それを持ち帰って、情報共有ミーティングで、要望に応えられる専門家へつないでいく。ただし、口頭やメモだけで情報が行き交うので、錯綜して伝わりづらくなるという部分も否めない。情報が増えることで、混乱が起きてしまうということもありました」

情報を集めることは必須だが、それを整理していくことがさらに重要だと小笠原は語る。

「震災対策本部の『本部日誌』ができたのは震災から4日目でした。時を同じくして、NTTドコモの携帯電話が一部地域で使えるようになったことで飛躍的に情報の整理が進みました。避難所から直接災対本部に連絡できるようになり、タイムロスがなくなりました。支援物資

についても、大槌町では何を必要としているのかを発信できるようになり、せっかく送ってもらった物資を無駄にってしまうことがなくなりました」

東日本大震災。巨大な自然の猛威の前で、人間の力は限りなく小さい。その事実を突き付けられた。小笠原と共に復旧作業に当たった白澤も、それを強く実感した一人だ。

「最初の3日間が一番苦しかった。もちろんそれ以降も大変なんですけど、どんどん慣れていくというか、まひしていく。今まで当たり前にあった電気、車、携帯電話、それらが一瞬で全て駄目になった。何もなくなつた状態では、人間は何もできないし、役場も動きようがない。では何を大事にするかと言ったら、やはり『命』です。避難所という場所に限定すれば、焦らずに、周りと協力しながら、助けを待つこと。3日間待てば、誰かしらから救いの手が差し伸べられる。それを信じるしかありません」

この第4章では、東日本大震災の

発災から3日間、中央公民館や城山公園体育館で何が起きていたのかを記した。この記録を小笠原の言葉で締めくくる。

「避難所の対応に当たった役場職員は、自分のことは後回し。落ち着いてきて、身内の安否確認をしてみると、妻や肉親が亡くなっていた職員もいた。混乱の時期を乗り越えられたのは、常日頃から職員は住民の生活を支えるのが役割という考えを持つ人たちがいたからだと思えます」

慌てず、騒がず、人の役に立つことを その思いが避難所に「光」をもたらしした

城山公園体育館で始まった避難所生活。子どもから高齢者までが共に暮らすことになった。消灯時間を巡って意見がぶつかり合った時、越田さんのアイデアが多くの人に安らぎを与えてくれた。

越田さんはあの日地震の瞬間、経営する本町の「越田商店」にいた。日用雑貨を扱いながら、家電などの簡単な修理も請け負っていた。近隣に暮らす人たちにとってなくてはならない店だった。

町立大槌小学校(現在の町役場)脇の坂道を下れば、県道大槌小鎚線にぶつかる。そのすぐそばにあつ

たのが越田商店だ。越田さんは持ち込まれたストーブの修理をしていたという。奥の茶の間には近所のお年寄りがお茶を飲みに来ており、にぎやかな声が聞こえていた。

午後2時46分、経験したことのない揺れが襲う。その場には危ないと感じ、思わず外へ飛び出した。ほどなくして、大槌小鎚線には車が連なり始める。中央公民館に避難する人たちが渋滞になっていた。

「津波で亡くなったのは、海からちよつと離れた所に住んでいた人が多い。ここまで来ないだろうという気持ちがあったはず。海の様子が見えていないので、避難するまでもな



こし た ゆき お
越田 征男さん

1945(昭和20)年3月、大槌町向川原(現在の末広町)生まれ。東日本大震災時には、大槌町役場(旧町立大槌小学校)前の石碑に駆け上がり、間一髪のところ津波の難を逃れた。日用雑貨を取り扱う「越田商店」を経営していたが、津波により被災。その後、2018(平成30)年に同じ場所で再開した。

脇にある石碑の立つ小高い場所に駆け上がった。

「その場所が上がったところで、津波の第1波が来た。石碑の高さまでは来なかった。ところが第2波はどんどん水位を増すので、私は石碑の上に立ち上がった。水は石碑の上端から15センチ下くらいまで来た。うちの店の向かいにあった文房具店、設計事務所の旦那さん2人は流されて亡くなった。津波の直前にも声を掛け合った2人が亡くなり、なぜ、自分が助かったのか。その理由は分からない。運が良かったと言っ

しかない」
越田さんは石碑の場所から動くことができず、地震発生から2時間ほどをその場所ですごしている。家屋が流されていき、爆発の音とともに火が燃え広がっていく。大槌小の校庭では大きな渦ができ、車がズブズブと沈んでいった。勢いを増した火が冷たい空気を温める。越田さんは寒さを感じることはなかったという。そして、目に映ったものを

一言で表現する。

「地獄の光景だったよね、あれは」
城山公園体育館には、千人を超える住民が避難していた。大声を上げるような人はいなかったが、積み積もった不安が口からあふれ出る。この町はどうなってしまうんだろうという声があちこちで聞こえていた。津波直後に起きた火事はさらに勢いを増し、大槌の町に広がっていた。そして体育館にもじわじわと迫りつつあった。多くの人が別の場所へと移っていく中、越田さんはそれでもとどまり続けた。

「津波が来ても、すんでのところ



震災時に越田さんのアイデアで武道場につるした電球は、今も残っている

いだろうと思っていた人もいたと思う。山も近くて、いざとなれば、すぐ逃げられると思ってしまふ。実際、町方地区は、大槌町で亡くなった人の半数以上に当たる660人が命を落とした」

で助かった。『ここで無理することねえべ』って思ったんだよね。バタバタしてもしょうがないと思った」

大槌町の火災は、2日目も続いていた。十分な消火活動ができない状況もあり、手をこまねいていた。

大槌町で最大の避難所であった城山公園体育館では、民間の人々が避難者の「取りまとめ役」として活躍していた。越田さんをはじめ、この場所に避難していた多くの人々が、避難所を支え続けたことは間違いない。越田さんには城山体育館での避難生活で記憶に残っていることがある。それは生活の明かりに関することだ。

「夜になると、早く寝る人と、遅くまで起きている人が出てくる。お年寄りというのは早く寝るし、子どもたちが騒いでいるのがうるさいわけよ。消灯の時間でもめた」

一計を案じた越田さんは、釜石市に出掛ける人に白熱電球を買ってきてほしいと頼む。消灯時間になると蛍光灯は全部消して、代わり

に電球を付けた。この柔らかな光が避難所に安らぎを与えた。

「昔ながらのあつたかい光。ポワツとした明るさで何だか落ち着くんだよね。これはいいとみんなが納得したんだよ。明るさでいえば、蛍光灯の方が断然明るい。新しい物、便利な物に人間は目が行きがちなんだけど、避難所のような特殊な環境で、人の心を和ませたのは、昔ながらの電球だったということは印象に残ってるね」

城山公園体育館の武道場。震災時、200人近くが暮らしていた。もはやその痕跡を見ることはできないが、その武道場の天井には、越田さんがつるした白熱電球が今も残っている。

震災当日から電気の復旧に全力

どんなに働いても疲れを覚えなかった日々

城山公園体育館に避難した高木正基さんは、電気保安技術のプロフェッショナル。震災が起きたその日から、電気の復旧に向けて動き出していた。要望があれば駆け付け、復旧作業に尽力しながら、避難所で暮らす人たちを見つめ続けた。

城山公園体育館には、発災当日に約千人が避難していたといわれる。その後、他の避難所に移る人も増えていったが、同体育館は常時約300人が避難生活を送る、大槌町最大の避難所だった。そこに避難していた人たちの中に高木電機管理事務所の高木正基さんもいた。

ことなく店はあった。姉と弟に避難を促した。そして、偶然居合わせた若者に見せられたワンセグ携帯電話の映像に衝撃を受ける。それは、釜石に押し寄せる津波の様子だった。これは大槌にも来る。それも桁外れの大きさの津波が。

現在の大槌町役場の近くまで来た時に後ろを振り返ると、土煙が上がっている。その向こうに水の壁が見える。近づいて来る津波は、まるでドミノ倒しのように電信柱をなぎ倒していく。あわてて全力で体育館に続く坂道を駆け上がる。後ろで「助けて」という声も聞こえた。でも、振り返ることはできなかった。あつという間に流れ込んだ水は、町立大槌小学校(現在の町役場)の校庭で渦を巻いていた。そして、車が巻き込まれていく。クラクションの音が鳴りやまなかった。城山公園体育館には、もうすでに避難者が押し寄せてきている。「てんでんこ」の教えを守った妻、5人の子どものうち小中学生と幼児の3人とは、

地震発生時、高木さんは大槌川上流の柵内地区まきないにいて、車の中で作業報告書を作成していた。今まで経験したことのない揺れの大きさ、そして長さだった。ラジオ番組は中断され、地震に関する内容になった。アナウンサーは「津波に注意してください」と繰り返し続けた。まず頭に浮かんだのは自宅のことだ。大槌川と小槌川の両河川の流域にある家は、確実に津波にのみ込まれるだろう。家族が無事、逃げていてくれることを祈った。

「わが家は(共倒れを防ぐために各自で逃げる)『津波てんでんこ』を日頃から実践していて、家族には、体育館に隣接する中央公民館の駐車場で会うことができた。高校生だった長男と次男は、津波が及ばない場所について無事だった。

夜が迫ってきていた。高木さんの奮闘が始まる。発電機の修理や配線の延長など、次々と寄せられる要

大きな地震があったときには指定避難所の城山公園体育館に逃げると言っていました。家にいないことを祈りましたね。私が言った通りに行動してほしいという思いで、体育館に向かいました。ただ市街地ではひどい

望に比べていった。避難時にヘルメットやテスター、工具などを腰に巻いていたことは幸運だった。すぐに作業に取り掛かることができた。自衛隊が、後に災害対策本部が置かれる中央公民館に到着したのは発災当日の深夜。高木さんは、その夜、町中が火事ではの明るかったことや我慢強かった避難者たちの姿を鮮明に覚えている。

「パニックになるような人はいなかった。案外みんな冷静だなと思いました。緊迫した状態では思った以上の力が出る。人間は強いものだと思えました。配給のおにぎりをもろう時も、ちゃんと整列して待っていた。日本人は大したものです」

食事が配給になったのは、翌12日の夕方だ。

「ゴルフボール大のおにぎり」と紙コップに半分入ったみそ汁でした。量は少なかつたけれど、中央公民館にいた役場の人たちが農家を訪ね歩いて調達してきたものでした。ありがたかった」



たかぎ まさき
高木正基さん

1961(昭和36)年8月、大槌町本町生まれ。東日本大震災時は城山公園体育館に避難。発災当日の夜から活動を開始し、停電状態だった大槌町の電力復旧に尽力した。2011(平成23)年12月から、小槌の仮設商店街「わらびっこ商店街」で営業再開。18(同30)年9月、新しい事務所スタートを切った。

渋滞が起きていて、全く車が進まない。Uターンして車を駐車場に止め、歩いて避難することにしました」

避難路の途中には、姉と弟が営んでいた家電店があった。古い建物だけに倒壊の心配もある。幸い倒れる

突然始まった集団生活。それはまるで「小さな町」だったと高木さんは振り返る。そして、城山公園体育館にはさまざまな職種の人が避難していた。体育館と中央公民館は町の復旧の拠点。ここから町内各地へ仕事に出掛けて行き、消防団、自衛隊も集まる機会が多かった。また、大槌町内には大槌高校という大きな避難所があった。

「大槌高校は生徒たちががんばった。城山公園体育館には比較的若い人は少なかつた。その代わりにお年寄りが張り切つて働いていた。生き生きしていた」

高木さんは地震発生からの濃密な1カ月が今も強く記憶に残っているという。そして、あれだけ忙しい日々を過ごしながら、疲れを感じることもなかった。

「何かに動かされている感じがしました。目の前に電気が付いていないなら、付けてあげようという気持ち。そういう使命感を背負って、一日一日を過ごしていました」



工具を腰に巻いていた状態で避難。その当時の道具を、歳月を経た今も使用している



大槌高校の外観は当時のまま。生徒が学ぶ教室も避難所として使われていた

東日本大震災は、つらく悲しいもの しかし、生徒たちを大きく成長させた

県立大槌高校には、生徒だけでなく、近隣住民が数多く避難していた。不安が渦巻く環境の中で、献身的に避難者の対応に当たっていたのは高校生たち。彼らは東日本大震災を経験することで大きく成長していった。

3月11日。その日の大槌高校は午前授業。午後の学校に残っていたのは、1、2年生の部活動をしている生徒だった。そこに今まで経験したことのない揺れが襲う。地震が収まったものの、すぐに大津波警報が発表された。当時の大槌高校校長・高橋和夫さんは、校門のそばに立

ち、その後の様子をうかがっていた。そこに女性の教職員が「津波だ！」と言いつつ駆け寄ってきた。学校の敷地から町を見下ろせる場所に行つてみると、町はすでに津波にのみ込まれていたという。

「現実のものと思えなかった。これが津波かというのもありました。いろいろなものが目の前で流されていく。そして、もやがかかっているような感じ。舞い上がった土煙でクリアに見えないんです。ほんやりと見えていて、現実感に乏しい光景でした」

校舎の渡り廊下のつなぎ目にひびが入っていた。余震が続いていたこ

ともあり、生徒たちを中庭に集めて待機させた。津波を見せたくないという気持ちもあった。その光景を見た生徒たちがどんな反応を示すかが予想できなかったからだ。程なくして大槌高校には大勢の避難者が押し寄せてきた。大槌北小学校の児童、みどり幼稚園の園児に加え、車で避難してくる人など、地震当日500人を超えるほどになっていたという。日が落ちると気温もぐつと下がる。外で待機させておくこともできず、体育館に避難者を誘導し、そこで夜を明かす準備を始めた。

避難所となった大槌高校は、生徒たちの避難者に向けた献身的な行動が際立っていたことで知られる。それは、震災当日の行動からもうかがわれた。

「学校のそばにセミナーハウスがありました。その中に部活動で合宿する時に使う布団が40組くらいあ

りました。高齢者に優先的に使ってもらおうようにしたのですが、数が全然足りない。大槌高校にはインターアクト部というボランティア活動をする部活があるのですが、彼らがダンボールをたくさんストックしていた。そのダンボールを配って、敷き布団代わりにしました。掛けるものはないですから、暗幕とカーテンを使いました。暗幕は一枚を何人かで使ってもらいました」

停電していて、懐中電灯も限られた数しかない。トイレに行くのも大変な状況だったが、インターアクト部の生徒たちが、湯のみやコーヒーカープにろうそくを溶かして芯を立て、ろうそくを作ってくれ、たくさん持っていた。それは先生に指示されたものではなく、生徒たちが自発的に始めたものだったという。やがて、インターアクト部だけでなく、生徒たちが避難者の世話をするようになっていった。例えばトイレの水。足りなくなれば、学校のプールの水をバケツで運んだ。例えば炊き出し。全員に行き渡る

だけのおわんがない。食べ終わったものを回収し、生徒たちがきれいに洗い、次に食べる人に渡した。お湯が出ないため、冷たい水で洗っていた。高橋さんは生徒たちのがんばりをたたえながらも、それは人間に本来備わっている性質ではないかと考える。

「古代思想家・孟子に『人に忍びざるの心』という言葉がある。人の不幸を見過ごすことができないということですね。人間は不幸を見過ごすことができない。これは大槌高校の生徒だからということではなくて、誰でもそういうものを持っていて、非常時に発揮されるんじゃないかって思っています。それにしても、生徒たちはがんばってくれたと思います」

大槌高校が学校を再開したのは、4月20日。その後も避難者はここにとどまり、8月7日に避難所としての役割を終えた。その間に、避難者、そして、自衛隊との間にも数々の交流が生まれ、生徒たちは多くの人たちの温かい心に触れてきた。

「5月下旬の夕方です。吹奏楽部の女子生徒が自衛隊に向かって演奏していた。何曲か演奏しているうちに、自衛隊の方もみんな出てきて直立不動で聴いていたそうです。最後は『ふるさと』を演奏したみたいで、自衛隊の隊員も全員敬礼してね、そうしたら吹奏楽部の女の子たちもそれに合わせて敬礼した。彼女たちなりの『感謝の演奏』だったのじゃない」

震災は事象だけ見ればつらく悲

しい出来事だ。しかし、生徒たちの心に大切なものを残した。あの日の大槌高校の生徒たちだけではなく、被災地の子どもたちの立ち振る舞いは素晴らしかった。高橋さんは、そういう子どもたちを育てていくという気持ちになったと語る。人づくりは「君手の未来づくり」なのだといえる。



たかはし かずお
高橋 和夫さん

1954(昭和29)年8月、岩手県二戸市生まれ。県立雫石高等学校、県立一関第一高等学校などで教壇に立ち、2010(平成22)年に校長として県立大槌高等学校に着任した。東日本大震災時には、大槌町最大規模の避難所となった大槌高校校舎で、生徒と共に力を合わせ、難局に立ち向かった。15(同27)年から、岩手大学教職大学院特命教授として活動。

役場庁舎の屋上に避難

自然の猛威を前に覚えた無力感

地震が起きた後、すぐさま駆け付けた役場庁舎で津波に襲われた。避難した屋上から目撃した津波の猛威。

3月11日は町議会定例会の会期中。平成23年度予算特別委員会を立ち上げ、午前中で休会となっていた。当時、大槌町役場に勤務していた赤崎仁さんは、午後2時から時間休を取り、腰を痛めた母を病院に連れていったという。そして、その治療中に大きな揺れが襲った。これはただ事ではないと思い、母を車で家に連れて帰り、自転車で役場へ向かった。通常なら2階総務課に災害対策本部を設置するところだが、余震が続き、老朽化した庁舎は倒壊の

危険があるという判断から、本部設置は庁舎前の戸外で行われることになった。その準備をしている最中に、屋根よりも高い黒い壁のような波が煙を巻き上げて近づいてきた。無我夢中で逃げることだけを考え、気が付いたら屋上に上がるはしごのところに来ていた。

屋上には22人が避難していた。赤崎さんはそこから見た光景を今も鮮明に覚えている。町は海面のようになつていた。轟音と共に家々や船などが流されていく。自然の猛威にさらされ、無力感を覚えるだけだった。

厳しい寒さの中、屋上で一晚を過ごすことになった。夜になると雪が降り出し、寒さが一段と増してき

た。22人全員で丸くなり、体を寄せ合いながら、励まし合った。さらに時間がたつてからは、水が引いた庁舎2階に行き、流れ込んできたがれきの板や柱を運び、燃やして暖を取った。真つ暗な町のあちらこちらで火の手が上がる。末広町の松の下方面の火は山に燃え移り、強風にあおられて上町方面からも火が上がり、町中が火の海となった。あちらこちらでガスボンベが爆発し、そのたびに火の勢いが強くなり、家の燃えて崩れる音がする。まるで地獄絵のような光景だった。

不安な夜は終わり、朝が近づいてくる。周りが明るくなって町の姿が見えてきた。津波が破壊し尽くした町は、現実として受け止め切れないほどの衝撃。夢を見ているような感覚で、ただ呆然とするのみだった。それから自衛隊のヘリコプターで、赤崎さんを含め、庁舎の屋上に避難していた人たちは救助された。空から眺めた町は、まだ海水が引き切つておらず、あちこちで煙が立ち込め、がれきの山や大型船が無残な姿でゴロゴロ転がっていた。広範囲を見渡すと、災害と被害の規模の大きさが分かり、大槌の町がなくなつてしまつたことを再認識したという。



あかざき じんいち
赤崎 仁 さん

1951(昭和26)年4月、大槌町八日町(現・本町)生まれ。2012(平成24)年3月まで大槌町職員として勤務し、災害で苦しむ町を支えた。同年4月には、社会福祉協議会に移り4年間勤務した。同協議会在籍時には震災記録誌の編さんなども手掛けた。